

マジカル★ビーストタイム★シャーマン
魔法の操獣巫女

エテ

Episode 1



つごもりむつき
津籠 睦月

～はじめに～

この本はファンタジー小説サイト「[言ノ葉ノ森](#) 

で連載中の  の [Episode 1](#) (デコレーション・モード・
[レベルMAX版](#)) を電子書籍化したものです。

電子書籍版はスペックの関係上、サイト版よりも機能が減っています。

(サイト版では一部絵文字等が動きますが、電子書籍版は動きません。

また、サイト版ではアンダーライン部分をクリックしていただくと

用語説明が表示されますが、電子書籍版では表示されません。

サイト版では文中の黒猫マークの部分に「場面検索もくじ」を使って
一発ジャンプできますが、電子書籍版ではできません。)

ご了承ください。

(ちなみに用語解説一覧は本編の後ろに「おまけ」で付いています。)

～内容のご紹介～

エデン はなのさかりがくえん
鈴木 楽園は花ノ咲理学園中等部に入学したばかりの、日英ハーフの中一女子。

知り合いの少ない新しい学校にちょっぴり苦戦しながらも、フツウの学園生活を送ろう
としていた...

だが、ある日 とつぜん 突然、実は日本の神官とイギリスの魔女の血を引く“魔法巫女”であるこ
とが判明し...!

アニマル成分多め、変則逆ハーレムな魔法少女風ファンタジー・ラブコメ!

懐かしい夢、ちょっと変わったうちのパパ



Episode 1: Not 魔法少女 But 魔法巫女!

～マホウショウジョジャナクテ、マホウミコナノ!～

自分の家庭がよそと比べてちょっと違うということに、人間は意外と気づかない。むしろ、そのちょっと特殊な家庭事情を、ごくごくフツウの当たり前と勘違いしてしまったりする。エデンの場合もそうだった。

いや、エデンの場合、分かりやすく特殊な母親のせいで、父親の特殊性に気づくのが少しばかり遅れてしまった、と言いついでできなくもない。



「ねえパパ、イギリスにはママのパパとママ—つまり、エデンのおじいちゃまとおばあちゃまがいるんだよね？」

小3当時のエデンの問いに、父・慈恩は縁側で膝の上のタヌキを撫でながら、困ったような顔で微笑んだ。

「そうだね、いるよ。今もお元気でいらっしゃると思うよ」

「……じゃあ、何で会えないの？エデン、おじいちゃまとおばあちゃまに会ったことも、メールやお手紙したこともない。それにイギリスにだって一度も行ったことない。そんなのヘンだって、みんなに言われた。エデンがウソをついてるんじゃないかって……」

エデンの母親は英国人、父親は日本人。つまりエデンは日英ハーフだ。

それを知ると大概のクラスメイトは珍しがり、自分たちの知らない“イギリス”の話をかきたがる。

だがエデンもまたそんなクラスメイトたちと同じく、イギリスのことなどほとんど知らなかった。

エデンの母親は自分の生い立ちや故郷のことについてはいつも言葉を濁し、教えてはくれなかったからだ。

「ごめんなー、エデン。パパとママはカケオチ同然に結ばれたから、ママのパパとママはもちろん、パパのパパとママにも、うかつに会いに行くことはできないんだ」

そう言いながら、慈恩は誤魔化すように足元に伏せた仔鹿の頭を撫でる。
「じゃあ、エデンはこれからもイギリスに行くことはできないの？」

「……そうだなー。いろいろな問題が解決したら、いつかは行けるかもなー。

あ……でも、その時にはこのコたちをどうするかな……。置いてけぼりにすると暴れるだろうからな……」

そう言って^{あた}辺りをぐるりと見渡す慈恩の視線の先には、タヌキ、イノシシ、キツネ^{ねこ}、ニホンザル、仔鹿、^{おおかみ}「狼」（……のように見えるが、ニホンオオカミは^{ぜつめつ}絶滅したはずなので、おそらくは狼に似た大きい犬なのだろうとエデンは当時思っていた）が、それぞれ思い思いの格好でくつろいでいた。

「そっかぁ……ミドリもボタンもコンちゃんもパン君もビビちゃんも、飛行機には乗せていけないもんねえ……。コタちゃんとななちゃんだけならイヌとネコでペットってことで連れて行けるかも知れないけど……」

「ははは。ふたりだけヒイキはできないなー。そうすると、パパは家にお留守番かな？」

「えー？それはダメだよ！それにななちゃんが行かないんだったら、エデンも行かない！だってエデンはななちゃんのごハン係だもん！一日だって離れ離れはダメなの！」

その時「ごハン」という単語に反応したのか、奥の和室から細身の黒猫が首輪の^{すず}鈴をちりちり鳴らして歩いてきた。

猫はエデンの前まで来て「なぁー」と鳴いた後、すぐに慈恩の腕にまとわりつき、甘えだす。

「あぁー！ななちゃん！ななちゃんのごハン係はパパじゃなくてエデンだって、いつも言ってるでしょ！？おねだりするならパパじゃなくてエデンじゃなきゃダメなんだからね！」

「ははは。これはごハンの催促じゃなくて、^{じゅんすい}純粹にパパに好意を示しているんだよ」

「もうっ！何でななちゃんも他のみんなも、パパが一番なの！？いっつもみんなをひとり占めしててズルいよっ！」

「ははは。仕方ないさ。だってパパはこのコたちの……」



そこで、エデンは夢から覚めた。

エデンはぼんやりとベッドの上に起き上がり、夢に出てきた懐かしい風景に思いを馳せる。

(……あれは、4年前かな……。あの頃はまだ、パパも皆もいたんだよね……)

平屋建てのこじんまりした日本家屋に、家族三人で、たくさんの動物たちに囲まれて暮らしていた幼い頃の記憶が、今もエデンにとって一番大切な思い出だ。

(あの頃はフシギに思ってなかったけど、パパってば何であんなに動物に好かれてたんだろう？犬(?)のコタちゃんや猫のななちゃんはともかく、フツウは野生の動物たちがあんな風にフツウの家でペットみたいに懐いてるってこと、あんまり無いよね……。しかもあんなにいろいろな種類の動物たちが、ケンカもせずと一緒にいたなんて……)

時計を見ると、目覚ましアラームの5分前だった。

エデンはベッドから下り、制服に着替え始める。二日前に入学したばかりの私立中学の制服だ。チョコレート色のセーラーカラーと、特徴的な形で入った桜色のラインがエデンは気に入っている。

(懐かしいな……。あれからパパが事故でいなくなっちゃって……。皆も、いつの間にかいなくなっちゃってたんだよね……。タヌキのミドリに、イノシシのボタン、キツネのコンソメに、サルのパンチ、鹿のビビンバに、犬(?)のコタツ、そして……。ななちゃん……)

幼いエデンにとって野生の獣や 軀の大きな犬(?)は、触れてはみたいものの何だか少し近寄り難く、唯一安心して可愛がれたのが“ゴハン係”として世話をしていた黒猫だった。

絹のようにつややかな毛並に金色の瞳、細くて長い優美なシッポを持つ美しい黒猫だ。エデンは今でもこの猫が世界で一番美しいと思っている。

(ななちゃん……。今もどこかで生きてるよね……。？いつか、また会えるよね？会いたいよ……。ななちゃん……)

いつもの願いを胸の中で囁きながら、エデンは窓辺に立ち、フリルとドレープがたっぷりついたカーテンを勢い良く開けた。

 その先に広がっていたのは、夢に出て来たこじんまりした庭ではなく、広々としたバルコニー、そしてその向こうに広がる美しい  英国式薔薇庭園 だった。

そう、今のエデンが暮らしているのは、幼い頃に住み慣れた平屋建ての小さな家ではない。明治時代の華族の邸宅を思わせる、広大で華麗で、古めかしい洋館だった。

「……夢と現実のギャップが激しい……」

ママはブロンド美女

思わず口に出してつぶやき、エデンは部屋を出る。

繊細な装飾の施された手すり付きの階段を下り、この屋敷の中でもとりわけ広いダイニング・ルームの扉を開けると、そこにはさらに現実味の無い光景が待ち受けていた。

「アラ、エデン。おはようございますです」

胸元の開いた黒サテンのワンピースに、グロスでつやつやと輝く唇、豊かに波打つ金髪をナチュラルに肩に流した、まるでハリウッドのセレブ女優のような美女が優雅に微笑み、朝のあいさつをしてくる。

「……おはよう、ママ」

エデンの母・コーデリア。日本での名は鈴木小照夜、イギリスにいた頃の元の名はコーデリア・クロウリー。彼女こそがエデンの生活を現在の状態へと激変させた張本人である。

「ママ、その格好で会社に行くの……？」

「今日は午前中から新商品の撮影があるので。家から直接向かうのです」
コーデリアも数年前——慈恩がいた頃までは、このような派手な姿ではなかった。長い髪を一つに束ね、服装はいつもシンプルな淡いパステルカラーのコーディネートで、いかにも清楚な母親という雰囲気漂わせていた。

それが、慈恩がいなくなり『これからはワタシがこの家の大黒柱なのです！』と言い出して化粧品の会社を立ち上げてからは『社長本人が美のカリスマにならなくては、説得力がありませんのです！』と、どんどん派手な容姿に変貌していった。

会社は同業者たちから『一体どんな魔法を使ったんだ？』と驚かれるほどのスピードで業績を上げていき、ついには中古物件とは言え、こんな豪邸を購入できるまでになったのである。

とは言えこの引越しに、住み慣れた家を離れたくなかったエデンは猛反対した。だがコーデリアは『エデンにはそのうち、広い住宅が必要になる可能性がアルのです！』と、よく分からないことを言い張って聞き入れてくれなかった。

そして、この屋敷に越してきてから、さらにエデンを戸惑わせている事態がもう一つ。それは……

 「おはようございます、エデン様」

「今朝はいつもより少しお早いですね、エデンお嬢様」

「すぐに朝食をお持ちします！お嬢様！」

ダイニング・ルームのあちこちから次々に声をかけてきたのは、執事風のスーツに身を包んだ、それぞれタイプの異なる三人の美青年だった。
「お……おはよう、ございます……。アンバーさん、マイカさん、アズライトさん……」

彼らはこの屋敷に勤めるハウス・キーパーたちだ。この場にはいないが、この屋敷には厨房係や庭師など、他にも容姿の整った男たちが勤務している。
（……いつも思うんだけど、何なの？このイケメン逆ハーレムは……。自分の家じゃないみたいで、落ち着かないよ……）

父がいなくなった後、次々と若い男を雇い入れ始めたコーデリアに、初めエデンは猛反発した。しかしコーデリアはどう見ても未だ慈恩一筋で、他の男と恋愛関係に発展しそうな気配は微塵もない。だが、彼らの方は……

「コーデリア様、朝の紅茶をお持ちいたしました」

「コーデリア様、今朝はどの新聞からお読みになりますか？」

「コーデリア様！新しいお花を飾ってみました！今回は元気が出るようにと

インコ風極彩色にまとめてみたのですが、いかがですか？」

コーデリアに群がる彼らの様子はまるで女王にかしづく下僕……いや、主人からホメられたくて必死にアピールするペットのようだった。その瞳にはいずれもコーデリアに対する切ないほどの情熱が宿っている。

他人の報われぬ片想いを朝から見せつけられたエデンは、今朝もいたたまれなさに身を小さくして朝食を終え、そそくさとダイニング・ルームを出ようとする。

「じゃあ、行ってくるね、ママ」

「あァ、エデン。チョット待つのです」

「え？何？」

「エデンが花咲に入学して、今日で3日目ですね？何か変わったコトは起きていませんか？」

「変わったこと……？ううん。べつに何も無いけど」

「そうですか。それならば、ヨイのです」

何か引っかかるような母の質問にわずかの違和感を覚えながらも、エデンはそのままダイニング・ルームを後にした。

通学バス・ハプニング！



 エデンの通う私立花ノ咲理学園中等部は専用の通学バスを持ち、いくつかのバス乗り場を巡回して生徒たちを拾っていく。

エデンはそんなバス乗り場の一つでバスを待ちながら、心の中で自分に気合を入れていた。

(今日こそは、もっと皆と仲良くなりたいと！教室でちょっとおしゃべりする程度じゃなく、一緒に遊んだりとかいろいろできる“友達”を作らなきゃ！)

父親の付けた独特な名前と、よくよく目を凝らして見れば「ひょっとしてハーフ？」と気づかれるようなやや色素の薄い髪と目の色により、エデンに話しかけてくれるクラスメイトは入学初日から結構な確率で存在した。

だが小学生の頃と変わらず、昨日も一昨日も、母親やイギリスに関する質問に上手く答えられず、がんばって代わりの話題を振ろうとするも空回りばかりしてビミョウな空気を作ってしまったエデンなのである。

(この学校、知ってる子、少ないんだもん。しっかり友達作りしておかなきゃ、これからの学校生活に関わってくるもんね)

失敗続きの2日間を思い出してほんのり凹みつつも、エデンの心はリベンジに燃えていた。早い段階でいかにクラスメイトたちと良好な関係性を築けるかで今後の1年間が変わってくると言っても過言ではないのだ。事態は切実だ。

(そう言えば、このバスに同じクラスの子、乗ってたりしないのかな？通学路が一緒だと仲良くなりやすいよね……)

到着したバスの扉が開くなり、エデンはタイムセールワゴンのお目当ての品を探し出そうとするかのような必死さで車内を見渡していった。だが、そのせいで足元への注意がすっかりおろそかになる。

気づけばエデンは車内へ上がるステップの段差を思いきり踏み外していた。

「きゃ……………っ💧」

(……ヤバいっ、転んじゃう……！しかもこの体勢のままじゃ、すっごく派手にコケちゃうよ……………！💧💧)

一気に血の気が引く。エデンは無意識に身を硬くし、これから訪れるであろう衝撃に備えた。

不思議に懐かしいあの人は...

だが、長いようで短い一瞬間の後の訪れたのは、想定していたのとはまるで違う『**ぼすん**』というごくごくソフトな衝撃だった。

「……………え？」

「……………大丈夫か？」

頭上から降ってきたのは、どこか懐かしい響きを持つ……………だが、全く知らない少年の声。

おそるおそる視線を上げると、そこには絹のようにツヤめくサラサラの黒髪にふちどられた、線の細い印象の少年の顔があった。

エデンはすぐには状況が把握できず、ただ呆然とその顔を見上げる。

(え……………と……………誰、だっけ……………？何だか、やけに懐かしいような気がするけど、思い出せない……………。って言うか、今のこの状況は……………？)

頬に感じる制服の生地感触と、支えるように背に回された腕のぬくもりに、エデンは遅ればせながら、自分が彼に抱きとめて助けてもらったことを悟る。

「わっ、うわわわわわわっ……………あ、あ、ありがと……………う、ご、ごさいます……………っ！

💖💧」

動揺のあまり言葉が上手く出て来ない。彼はにこりともせずエデンを見つめると、無言でその体勢を整えさせ、さっさとバスに乗り込んでいってしまった。

だがエデンはその去り際、彼の唇からこぼれた小さなつぶやきを聞き逃さなかった。

「……………ったく、相変わらず危なっかしいやつ……………」

「え……………？」

(この人、私のこと知ってる……………？何だかこの人を見てると、泣きたいくらいに懐かしくなる……………これは、気のせいじゃ、ない？でも、思い出せない。分からないよ。この人、誰なの……………？)

思うがままに質問を浴びせたかったが、彼はもはやエデンの方など一切見ておらず、その横顔からは『話しかけるな』と言わんばかりの威圧感が感じられた。

エデンはしかたなく、少し離れた座席から、窓の向こうの景色を見るフリをしながらチラチラと彼の姿をながめることにする。

「ねえねえ、あのヒト、なんかカッコよくない？クールな美少年ってカンジ。あんなヒト、うちのガッコにいたっけ？」

すでに車内にいた女子二人組が、彼の方を指差してヒソヒソささやくのが聞こえてくる。

(2年生……。じゃあ、一年先輩なんだ)

さっきから心臓がドキドキと激しく脈打って落ち着かない。それがステップを踏み外しかけたせいなのか、それとも別の何かのせいなのか、エデンには判断がつかなかった。

(話しかけたい……。なあ。でも、何だか近寄りがたい感じがするし、心臓がドキドキし過ぎて上手くしゃべれない気がする……。それに、そもそも何て言って話しかけたらいいのか分からないよ……。)

エデンがそんな風にモヤモヤ悩んでいる間にも、バスはどんどん進み、学園に近づいていく。

中高一貫で多数の生徒を抱える花ノ咲理学園は、丘(……。と言うより、もはや小規模な山)をまるごと一つ敷地に持つ広大な学校だ。そんな学校の敷地への入口を示す立て看板の横をバスが通り抜けた瞬間、エデンは妙な違和感を覚えた。

(……。え？何？今、なんか肌がピリッとしたような……)

何が起きたのか分からないまま、何となく車内を見回してみる。すると、例の少年が先ほどまでとは打って変わった険しい表情でこちらに近づいて来るのが目に入った。

「……。とうとう来たか。まあ、これだけ魅力的なエサに飛びつかないはずがないってのは分かっていたがな……」

少年は口の中でぶつぶつとつぶやきながらエデンの横まで移動して来ると、おもむろにその腕をとった。

「え……。!? あの……。」

戸惑うエデンに少年はひそめた声で告げる。

「お前、今からしばらく俺のそばから離れるな」

「ええ……。!? な、な、何で……。」

言いかけ、だがその言葉を最後まで言い終わらぬうちに、エデンはひどいめまいに襲われた。

少年は舌打ちし、エデンの腕をにぎる力を強める。

世界が歪み、ぐるぐる回っているような感覚の中、エデンはどこかで聞いた覚えのある、**スリン**という鈴の音を聞いた。



一瞬だけ意識を失った後、エデンはハッ^{！！}と目を覚ました。
気づけば、そこは既にスクールバスの中ではなく、全く見覚えのない**奇妙な場所**だった。

まるでスクラップ置き場か何かのように巨大なゴミやガラクタが**雑然**と積み上げられた向こうに、不思議な形の石組が見える。

「何……あれ……。岩でできた**鳥居** **𠩺**……？それとも、イギリスの**ストーンヘンジ**……？」

「……もう気がついたのか。さすがはあの人たちの娘だな」
「え……？」

声のした方へ視線を向けると、傍らには変わらず例の美少年がいた。だが、その姿は先ほどまでの制服姿ではなく、まるで**神社**にいる**神職**が身につけるような**袴姿**に変わっていた。

「あれ……？いつの間に着替えた……んですか？」

まだ上手く働かない頭で寝ボケたように問うと、すぐに叱責の言葉が飛んできた。

「ばか！今はそんなのん気なことを話している場合じゃない！あれを見ろ！」

血相を変えた少年が指差す方へ顔を向け……エデンは思わず自分の目を疑った。

「え……？何、アレ……**陽炎**……？」

それはエデンが今まで目にしたことのない不可思議な現象だった。その場の景色を歪めながら、まるで透明の炎のように揺らめく“何か”が、一頭の獣の姿を形作っている。

「アレは“**災厄の獣**”。日本では古来“オニ”と呼ばれ、西洋では“**悪魔**”と呼ばれてきた……人々に災いをもたらす存在だ」

変身しろって言われても...

「え!? 何、ソレ!? ……って言うか、ここはどこ!? 何で私、こんな所にいるんですか!?!」

パニックに陥るエデンに、少年は獣から目を離さぬまま早口に説明する。
「ここはヤツの結界の中。お前はアイツに狙われ、結界の中に引き込まれたんだ。
お前の中にはアイツの力の源となる特別な力が眠っているからな」
「特別な……力? 何ですか、それ」

「今は長々と説明している余裕がない。とりあえずアレを倒してここを出るぞ。一応訊くが、お前、もう変身はできるのか?」

さらりと問われ、エデンは一瞬自分が何を言われているのか分からなかった。
「……………は? へ、変身……?」

「……その様子だと、やはり何も教えられていないのか。……コデリ様も相変わらずだな」

後半はひとり言のようにつぶやき、少年は獣の方を警戒したまま顔だけをエデンの方へ向ける。

「いきなりのごとで混乱しているだろうが、こうなった以上はお前に変身してもらえない。アイツに勝てるような自分の姿をイメージして、心に浮かぶ“言霊”を唱えるんだ。大丈夫、今のお前にはその力が備わっているはずだ」

「そ、そんなこと言われても……っ、わ、分からないよ……っ、頭の中真っ白で何にも浮かんで来ないよ……っ!」

エデンが泣きそうな顔でそう叫んだその時、災厄の獣が大きく吠えた。

次の瞬間、獣の脇に積まれていたガラクタの一つがふわりと宙に浮き、ふたり目がけて凄まじい勢いで飛んで来る。

「危ない……ッ!」

少年はとっさにエデンの身を抱きかかえ、横に跳んでその攻撃を避ける。

「や……やだ……っ、な、何が……?」

おそろおそろ今までの場所に目をやると、そこには半分壊れた冷蔵庫が地面をえぐって転がっていた。今さらながら恐ろしさに顔を強張らせ震えだすエデンに、少年は表情と声は厳しいまま、落ち着かせようとでも言うようにゆっくりと言葉をかける。

「大丈夫だ。お前ならできる。お前、小さい頃には散々オモチャのステッキを振り回してゴッコ遊びをしてただろう？あれでいいんだ。あの頃はまだ力が育っていなかったから変身はできなかったが、今ならできる。憧れていたんだろう？悪を倒す正義のヒロインに」

「え……？何でそんなことまで知って……」

だが訊き終わる前に獣が再び吠えた。少年は舌打ちし、エデンをかばうように前へ出る。

スりん という音とともに一瞬にして空中に巨大な盾が出現し、飛んで来たガラクタを弾き飛ばして消滅する。

「早く！俺が時間をかせいでいる間に変身するんだ！」

「は……はい……っ」

エデンはその場にへたり込んだまま、懸命に思考をめぐらす。

(は、早く変身しないとっ、この人が危ない……っ。へ、変身・ヘンシン・メタモルフォーゼ……魔法少女っぽい、キラキラなイメージの“呪文”で……)

幼い頃に見たアニメの変身シーンを頭の中に思い浮かべながら、エデンは覚悟を決めたように立ち上がり、その“変身呪文”を口にした。

「キャ…… キャラメル★キャラメラ★キャラメリゼ☆」

思わず決めポーズまでつけて唱えたものの、エデンはすぐに激しく後悔した。

(うう……っ、我ながら何の三段活用なんだろう、これ……っ、っていうか、これで変身できなかつたら恥ずかし過ぎるんだけど……っ)

羞恥と不安にいたたまれなくなるような一瞬の間の後、エデンは眩い光に包まれた。

それまで身につけていた服の感触や重みがふっと消え、身体の周りを光でできた羽根やネコのシッポのようなフワフワしたものが飛び回った……ような気がしたが、あまりに一瞬のことだったので、エデンにははっきりと知覚できなかった。そして気がつけばエデンは花ノ咲理学園の制服とは似ても似つかない衣装を身にまとっていた。

巫女の緋袴を思わせる幅広のプリーツのついた紅いミニスカート、胸元に三段

フリルのついたノースリーブの白い上衣。腕には着物の袖のような広がりを持つアームカバー。腰には白猫のシッポに似たもこもこ素材の帯。えり元には蝶々結びの赤紐がついたフワフワの白いティペット。脚には白いファーと赤い紐飾りのついたオーバーニーソックスと、どことなく草履を彷彿とさせるデザインの厚底サンダル。

エデンはそんな自分の姿を見下ろし、思わず赤面した。

「何これ、何これっ！何でカラーリングが紅白なのっ!? ハデ過ぎるでしょっ! もっとピンクとかの パステル・カラー が良かったよ……っ」

「……なるほどな。神職の父親と魔女の母親の間に生まれた娘はそうなるってことか。ただの巫女でも魔女でもない。この世界にただ一人の“魔法巫女”ってところか……」

「え……？私のパパとママが何……？」

聞き逃せない事実が耳に入り、思わず聞き返そうとしたその時、エデンの目の前に眩しく輝く棒状の光が現れた。

「え？え!? 今度は何っ!？」

「お前の“杖”だ。手に取ってみろ」

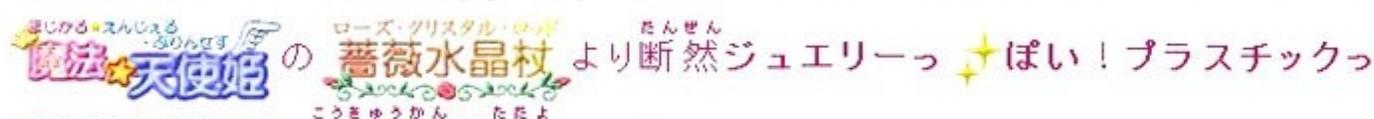
「つ、杖って……もしかして、魔法の……？」

エデンはドキドキしながら光に手を伸ばした。手を触れると、ぼんやりした棒状だった光は独特な形状をした“杖”へと変化していく。

パールピンクの軸に、柄の部分は短毛種のネコの前肢そのままの形でフワフワの短いファーに覆われ、先端には一对の翼と、中に鈴の吊るされた黄金のハート……に遠目からだと見えるモチーフが現れる。

一瞬だけ振り向いてその杖の形状を確認した少年は、その途端、何とも言えないビミョウな表情になった。

「うっわああああ……カ、カワイイ♥……っ。コドモの頃誕生日に買ってもらった

魔法天使姫の薔薇水晶杖より断然ジュエリーっぱい! プラスチックっ

ぱさが全然無くて高級感が漂ってる……！」

ひとり興奮するエデンに、少年は視線を「獣」の方へ向けたまま、ぼそりとツッコミを入れる。

「いや、材質や雰囲気より、フォルムがそもそも微妙過ぎだ。何でただのハートじゃなくてハート型に身をくねらせた黄金のネコなんだよ。明らかに姿勢と体型が不自然過ぎるだろう。おまけに柄がリアル猫脚過ぎてキモチワルイ……」

そう。エデンの杖の先端部分はただのオープンハートではなく、猫の「**軀**」とシッポでハート型を表したものだ。しかも柄の部分は裏側に**びにびに**にした**肉球**（

じょう かし ほんかくてきねこあししよう
状の飾り）まで付いた本格的猫脚仕様だ。

「えへへ……っ、私の杖、何で名前にしようかな。ハートにキャットで……ハートフル・キャット・ロッド……とか？」

「おい、コラっ！ のん気にネーミングを考えている場合かっ！」

エデンが状況をすっかり忘れて杖に夢中になっている間にも「獣」は攻撃を仕掛けて来る。寸前で攻撃を弾き返した少年に振り返って怒鳴られ、エデンはハッと我に返った。あわてて杖を握りしめ、少年の隣に駆け寄る。

「あ……っ、私、これでどうやって戦えばいいんですか？」

「……今回は俺が力を貸してやる。俺の能力は“具現化”。頭の中のイメージを形にする能力だ。攻撃のイメージを頭に浮かべ、それにふさわしい言霊を紡げ……と言っても、初心者のお前には難しいだろうな」

説明を聞きながら既に『いっばいっばい』という顔をしているエデンに、少年はため息をついて向き直った。

「仕方がない。特別に俺の記憶を視せてやる。今回はコレを真似すればいいだろう」

言いながら、少年はエデンの腕を引き寄せ、顔を近づけていく。

「……えっ？」

こっぴどと額に額が触れる。瞬間、エデンの頭の中にある映像が流れ込んで来た。まるで映画か何かでも見ているようにハッキリ浮かぶその光景の中にいるのは、エデンにとってあまりにも見覚えのある人物で……

「……えっ？ パ、パパ……？」

「分かっただろう？ 今回はとりあえず、慈恩の技を使えばいい。簡単な呪文だから

魔法の呪文はパパ譲り☆

一度で覚えられたな？」

額を離し、少年が問いかける。だがエデンは混乱してしまってそれどころではない。

「え!? パパもこんな風にあれと戦ってたんですか!? って言うか、呪文って……アレが!?」

「……言いたいことは分かるが、話は後だ。それにお前のセンスも大概親譲りだぞ」

さりげなくセンスについてけなされた気がしたが、エデンは聞かなかったことにして杖を構える。額を通して視せてもらった父の姿そのままに杖を握った手を前に突き出すと、その拳を少年が後ろから、エデンの背中越しに両手で包み込んだ。
(……あ、何か、あったかい……。このカンジ、すごく懐かしいような……)

手のぬくもりを通して、身体の中に不思議な力のようなものが流れ込んで来るのが分かる。

「行くぞ！エデン！」

「は、はい……っ！えっと…… きなこ・あんころ・さくらもちっ！」

ただ食べ物の名前を並べているようにしか思えないその“呪文”をエデンが唱えた次の瞬間、杖の先からキラキラ輝く粉末状のものが災厄の獣目がけて飛び出していった。

それを浴びた途端、獣はまるで目や鼻にきなこ状の粉でも振りかけられたかのように身悶えだす。

“攻撃”はそれで止まらず、次は小豆大の光の弾丸が次々と獣の身を射抜き、悲鳴を上げて地に倒れ伏した獣を、さらにはさくら色のねっとりした巨大なもち状の物体がサンドして完全に動きを封じ込めた。

エデンはほっと安堵の息をつくとともに、ひどく複雑な表情になる。

「……『きなこ・あんころ・さくらもち』って……パパ……」

「……ネーミングはともかく、威力はなかなかのものだろう。センスについては直そうとして直せるものでもないし、あきらめるしかない。そもそも娘に“樂園”と名付けるような父親なんだからな、あいつは」

言葉ではけなしながらも、その口調にはどこか **あたたかい情** のようなものが感じられた。エデンは不思議に思って口を開く。

「あの、あなたはパパとどういう……」

だが、エデンはその問いを最後まで口にすることができなかった。

粘つく物体に絡めとられ、激しくもがく獣の **悲痛な声** が耳に入ったためだ。エデンはハッと**災厄**の獣を振り返る。

「大丈夫だ。あいつの動きは封じられている。お前が技を解除しない限り攻撃してやることはない」

「でも……何だかあのコ、かわいそう。苦しそうだし……」

悲鳴を上げてもがく獣の姿が、エデンにはまるで虐待されている動物のように見えた。自分がそれをしたのだと思うと、ひどく **胸が痛む**。

「……自分を攻撃してきた相手に対しても、そんな風に思うのか。そういう所も、父親にそっくりだな……」

「え……？」

少年はエデンの顔をしばらく見つめると、何かをあきらめるように一つ大きなため息  をついた。

「お前ならあいつを救うことができる。あいつと**契約**を**交**わし、あいつを“**災厄**の**獣**”ではなく、魔法巫女に**従**う“**契約**の**獣**”にするんだ。そうすれば、あいつは力有る人間を襲わなくてもお前の力を得て生き延びることができるし、お前はあいつの持つ能力を自分のモノにすることができる」

「そんなことができるの？」

「ああ。この国ではかつて**陰陽師**やその系譜を受け継ぐ**神官**たちが**オニ**と呼ばれるモノたちを**従**わせて己の**使鬼神**とし、西洋では**魔女**が**悪魔**と呼ばれるモノたちと**契約**を**交**わし**魔力**を得てきた。お前は**その両方**の**血**を受け継ぐ者。あいつの**主**となる**資質**を持っている」

「分かった。やってみる」

エデンは少年のそばを離れ、ひとり**災厄**の獣の前に立つ。獣はエデンを目にすると**獐**猛な **うなり** 声を上げた。エデンはその声に足をすくませながらも、おそろおそろ呼びかける。

獣じゃなくて、私の...

「あの……ね、ごめんね。ひどいことして。でもね、あんな危ないモノを飛ばして人を攻撃するのはダメなの。分かってくれるよね……？」

宥めるような、諭すような、攻撃性の全く無いその声に、獣のうなり声は様子がかうかのように小さくなる。その様子に安心して、エデンは身を乗り出す。

「あのね、こんな風にして力のある人を襲わなくても、私と契約すれば、あなた、生き延びることができるんだって。だから、仲良くしようよ。だから私の“契約の獣”に……」

言いながら、エデンはふとその言葉に違和感を覚えた。

(……“契約の、獣”……？それって何か、違う気がする。何だかそれじゃ、契約で仕方なくつき合ってるってだけの冷たい関係みたい……。せっかくなら、もっとフレンドリーでアットホームな関係がいいな。パパと、パパに懐いてたあの動物たちみたいな……)

悩んだ末、エデンはふっと閃いた。

「あなた、私と契約して、私の愛犬になってよ！」

そのセリフに、背後で少年がその場に崩れ落ちそうになる。だがエデンはまるで気づかず、満足そうな微笑みを浮かべた。

(うん！このコって何だか大型犬っぽくも見えるし、ピッタリ！うち、あんなに広いのにペットが一匹もいなかったもんね。本当は、あのお屋敷に似合いそうなゴールデン・レトリバーとか飼って見たかったんだかど、まあ仕方ないか)

獣はどこかきょとん？としたようにエデンの微笑みを見つめていたが、やがて

「キュウン」と鳴いて「服従します」とでも言うように頭を地に伏せた。

「……どうやら契約を承諾したようだな。エデン、こいつに名を付けてやれ。それで契約は完了する」

「え……っ？名前……？そんな急に言われても……。じゃあ、えっと……“レト”で」

とっさにゴールデン・レトリバーから名を取り、エデンは歩み寄ってきた少年を振り返る。

ハジメテの、お姫様抱っこ

「あの……そう言えば、今さらなんですけど、あなたの名前って……。それに、何者……」

言いかけ、エデンはふいに訪れた目眩にうずくまった。通学バスからこの“結界”の中に引き込まれた時と同じ、世界が歪み、ぐるぐる回るようなひどい目眩だ。

少年はエデンの肩に手を触れ、支えるようにしながらそっとささやいた。

「……猫神。俺は“猫神”だ」

朦朧とする意識の中、エデンは自分が元の制服姿に戻り、スクールバスの中に戻って来たということだけは悟った。だが、それでも目眩は治まらず、身体中がひどく重くて動くことができない。

「え……っ!? その子、どうしたの!？」

バスに同乗していた女生徒の声が、どこか遠くから響いているように聞こえる。

「どうやら貧血のようです。俺が保健室まで連れて行きます」

すぐそばから聞こえてくるのは、あの少年の声だ。

(……猫…神……。……猫神…先輩……。……?)

目を開けることもできぬまま、エデンは猫神に横抱きに抱え上げられ、連れて行かれる。

(そんな……待って……。こんな、人生初の  なのに……。気を失うなんて、もったいな……)

そんなことを考えながら、エデンは本格的に意識を失っていった。



次にエデンが目を覚ました時、そこは見慣れた自分の部屋の 天蓋 付ベッドの中だった。

エデンは飛び起きて辺りを見渡した後、はあーっとため息  をつく。

(……何だ、夢か……)

何だかもったいないような、ガッカリ  したような気分で時計に目をやり、エデンはぎょっとする。

「え!? 5時!?  っ!? 私、何で……。っ!? 学校は……。っ!？」

あわててベッドから降り、パジャマ姿のまま廊下に飛び出す。すると、そこには……

私のワンコ、すごくイケメン...！？

「あ……お気がつかれたのですね。 **我が姫君**」

心からうれしそうに笑顔を浮かべエデンの前にひざまずいたのは、全く見覚えのない若者だった。色素の薄い長めの髪を持ち、どこか **高貴な雰囲気** を漂わせた、エデンより2～3才年上に見える少年だ。エデンは戸惑い、とりあえず質問してみる。

「えっ……と、あなたは……ひょっとして、ウチの新しいハウスキーパーさん……ですか？」

「いいえ。俺は貴女の“愛犬  ”です。今朝貴女のモノにしてくださったではありませんか。覚えておられませんか？“レト”です」

「え、え!? **ええええええ〜っ!?**」

エデンはパニックに陥り、逃げるように廊下を走り出した。

「え……？ちょっと……  お待ちください！姫君っ！」

後ろから飛んで来る声を振り切るように階段を下り、扉の開いていたダイニング・ルームに飛び込むと、そこにはいつものこの時間ならまだ帰宅していないはずの母親と、三人のハウスキーパーがいた。

「マ、ママっ！どうしよう！  ヘンな人がいる！すごい **イケメン** なのに、私の愛犬だとか、私のこと姫だとか、わけ分かんないこと言う人が……っ！  」

混乱したまますがりつくように抱きついてくる娘の頭を宥めるように撫で、コーディネリアは優しく告げる。

「ヘンな人だなんて、可哀相です。あのコはあなたがハジメテ契約を交わした“**エンゲージド・ビースト** 契約の獣”なのでハ、ありませんか……？」

「ち、違うもん！あれは夢……って言うか、そもそも私が契約したのは

透明な大型犬 みたいなコで、人間じゃないし……！」

「アラ、契約の獣は人間の姿にもなれるノですヨ。ココにいるハウスキーパーたちも、皆ママと契約を交わした**エンゲージド・ビースト** 契約の獣たちなので」

『ホラ』と言ってコーディネリアが腕を広げると、そばに控えていたハウスキーパーた

そして始まる、非日常。

ちの姿が一瞬にして別のものへと変わる。大きな羽ばたきの音とともに現れたのは……

「鷹に、白鳥に……ルリコンゴウインコ……？」

エデンは呆然と現れた鳥たちの名をつぶやく。三羽の鳥に囲まれて、コーデリアは妖艶に微笑んだ。

(……そう言えば、“夢”の中で猫神先輩がママのこと魔女って……)

もう目眩は治まったはずなのに、エデンは何だか精神的に目眩を感じた。

「力に目覚めてすぐに契約を成功させろなんて、サスガは私と慈恩のムスメなのでス！ママはうれしいのです！」

はしゃぐコーデリアを前に、エデンは引きつった笑みを浮かべる。知らなかった……。できれば知らずにいたかったよ……。ウチが、こんな……フツフじゃない家だなんて……！)

自分の家庭がよそと比べてちょっと違うということに、人間は意外と気づかない。だがエデンの場合、「そもそもこんな特殊過ぎる事情、思いつくわけじゃない！」と言い訳できなくもない。

エデンの“日常”は、こうして中学入学3日目にして崩れ去った。

そうして始まった特殊過ぎる“非日常”に彼女が適応できるようになるまでには、まだまだ時間を要することになるのである……。

Episode1 End

Next Episode→「My 愛犬 is like a 王子様」



用語解説一覧（本編掲載順）

以下の単語をクリックしていただくと、別画面で用語解説ページが開きます。

（オンライン状態でないとご利用いただけません。）

- [慈恩](#)
- [言葉を濁し](#)
- [エデン](#)
- [ミドリ](#)
- [パンチ](#)
- [ビビンバ](#)
- [コタツ](#)
- [ななちゃん](#)
- [フリル](#)
- [ドレープ](#)
- [コーデリア](#)
- [アンバー](#)
- [マイカ](#)
- [アズライト](#)
- [スクラップ](#)
- [ストーンヘンジ](#)
- [災厄の獣](#)
- [衣装](#)
- [アームカバー](#)
- [ティペット](#)
- [オーバーニーソックス](#)
- [パステル・カラー](#)
- [ハートフル・キャット・ロッド](#)
- [きなこ](#)
- [あんころ](#)
- [さくらもち](#)

- [ゴールデン・レトリバー](#)
 - [天蓋](#)
 - [鷹](#)
 - [白鳥](#)
 - [ルリコンゴウインコ](#)
-

LINK集

- [オリジナル・ファンタジー小説サイト「言ノ葉ノ森」TOP](#)
- [魔法の操獣巫女☆エデン（サイト版）TOPページ](#)
- [素材集一覧](#)



この度は、魔法の操獣巫女エデンをお読みくださり、ありがとうございます！

今回のこの「デコ盛り版」はネット小説ならではの新しい試みとして、各キャラクターごとにセリフを色分けしてみたり、絵文字をつけてみたり、文字に装飾を施して「見た目にも楽しい小説」を目指してみたりしているのですが、いかがだったでしょうか？（「逆に読みづらいよ！」という方がいらしたら、誠にすみません…。サイト版では装飾やルビのON/OFFが調節できますので、ぜひそちらもご覧いただければありがたいです。あと、画像表示がおかしかったり、リンクエラーなどの不具合がありましたらコメント等でご報告いただけるとありがたいです。）

絵文字・文字装飾は津籠睦月本人が[素材集](#)の素材等を利用しながら制作したのですが、単語や文章のイメージを絵で伝えるのは思っていたよりも難しく、試行錯誤しながら制作しつつ、普段何気なく使っている絵文字や、何気なく目にしているロゴなどのデザイナーさんってすごいんだな、と改めて思ったりしました。

表紙も津籠睦月本人が描いていますが、スキャナ使用不可・ペンタブレット無しという環境のため（元絵を携帯で撮影して画像データ化→それを下敷きにノートPCのパッドで線をなぞって描くという、ちょっと間抜けな方法をとって描いています…。）アップでご覧いただくとかなりいろいろアラが目立ちます…。

（しかも三段フリル部分の赤紐を描き忘れていたり…。）

お目汚しで恐縮ですが、個人制作で作った電子書籍ですので「まあ仕方がないな」という目で見ただけだとありがたいです。

ちなみにスペックの都合上、この電子書籍版では絵文字も文字装飾も動きませんが、サイト版では絵文字も文字装飾もやたらと動きます。

さらにはサイト版ではアンダーライン部分をクリックすると小窓に用語解説（だいたいほとんど画像付き）が表示されたり、文中の黒猫マークの部分へ「場面検索もくじ」で一発ジャンプできたりします。

なので、ぜひ一度ご覧いただいで遊んでいただければ幸いです。

この作品に限らず、サイトの方では様々な「ネット小説だからできる新しい小説形態」の実験をしているのですが、読者様のリアクションがほとんどないので、ウケているのか、ただの変な作品と思われているのか分からないのがちょっと心配なところです…。

。

また、津籠睦月の過去作品を既にお読みの読者様には過去2作品との作風の違いに「

何やってんの!？」と思われるかも知れませんが（過去2作品は超シリアスな和風ファンタジー&ちょっぴりコメディな児童文学風ファンタジー）、本人はいたってマジメです。

元々小説に対する興味が世界設定よりも人間ドラマに向いていることもあり、ジャンルに関しては節操が無いというか、「オモシロいものが書けそう」と思うと何にでもチャレンジしてみたくなる性質なのです。

というわけで、この一見王道な(?)少女マンガ風・魔法少女・逆ハーレムな物語も、今後は津籠睦月ならではのちょっとひねくれた展開(←過去2作品をお読みいただければ意味が分かるかと思います。)をしていくかも知れませんが(でも過去2作品よりは、おとなしめなひねくれ方かと思います。)よろしくおつきあいいただけたら幸いです。

(...というか、現時点でも既に多少ひねくれているかも知れませんね...。)

魔法の操獣巫女☆エデン

<http://p.booklog.jp/book/111203>

著者：津籠睦月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mtsugomori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111203>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト